

自らの過ちを認めることから

上 廣 哲 治

新型コロナウイルスが経済活動に与えた影響は、計り知れないものがあります。帝国データバンクの調べによれば、この感染症に関連する倒産は、今年の八月四日現在で累計三三五件に上りました。業種別では飲食店がもつとも多く、建設・工事業、食品卸、ホテル・旅館が続くといえます。

コロナ禍で苦しむ中小企業や個人事業主への支援策として、国は「持続化給付金」や「家賃支援給付金」などの制度を設けました。しかし、緊急性を考慮して事前審査を簡略化したこともあり、給付金をだまし取る事件が多発しています。とりわけ大きな問題になったのは、国家公務員による詐欺事件です。今年の六月には、国税局の職員やOBらのグループが約二百人に嘘の給付申請をさせ、大金を詐取した疑いで逮捕されました。昨年も、経済産業省の官僚が虚偽の書類などを作成して給付申請し、ペーパーカンパニーの口座に入金させたとして逮捕されています。国民を救うための制度が、それを運用する当事者によって悪用されたわけで、倫理のかけらもない行為には言葉を失うほかありません。

国家公務員法の第九六条には、「すべて職員は、国民全体の奉仕者として、公共の利益のために勤務し、且つ、職務の遂行に当つては、全力を挙げてこれに専念しなければならない」という「職務の根本基準」が記されています。近年の深刻な不祥事を見るにつけ、「国民全体の奉仕者」というもつとも大切な理念が、出世欲を含む私利私欲の前に崩れ去ってしまったのではないかと心配になります。

公務員の倫理について考えるとき、かつて読んだ一冊の本のことを思い出します。中国の明代後期に呂坤という思想家が著した『呻吟語』です。呂坤は官僚のトップにまで上りつめながら、六十二歳のときに中央政界の腐敗ぶりを訴える意見書を提出し、周囲から批難されたため、病気を理由に官を辞して帰郷します。その後は、以前から書きためていた短文をもとに、この本の編纂に努めました。

呂坤が官僚だった時代、官界の倫理は大いに乱れ、政治家も官僚も私利私欲に走って、派閥争いを繰り返していました。そのため『呻吟語』の内容も、「リーダーとはどうあるべきか」という処世訓が中心となっていて、同様の倫理の衰退を目の当たりにしている現代の私たちにも、大いに通じる内容となっているのです。たとえば、次のようなくだりがあります。

「官職が高ければ高いほど、見聞が狭くなる。その耳目をおおうものがたくさんいるからである。逆に官職が低ければ低いほど、見聞が広くなる。その見聞することが真実だからである。だから見聞の範囲を論じると、君主の知識は宰相に及ばないし、宰相の知識は監察官に及ばないし、監察官の知識は地方の長に及ばないし、地方の長の知識は人民に及ばない。耳目をおおう順序を論じると、地方の長は監察官をおおい、監察官は宰相をおおい、宰相は君主をおおう。低ければ低いほど、目につく民情を、より高い地位にいる者に聞かせることができないのは、何とも残念なことである」(荒木見悟訳)

私たちは、地位が高いほど見聞が広くなるものと考えがちですが、呂坤は逆だといえます。なぜな

ら、身分が下の者は上の者に対して、都合の悪いことを伝えなくなってしまうからです。アンデルセンの『裸の王様』を連想させるような内容もありますが、ここで特記しておきたいのは、呂坤が自らの経験や失敗をふまえ、「自戒」をこめてこの文章を書いていることです。

実際に呂坤は、わが身の言動を反省し、官界の墮落に染まらない品性を鍛えるため、「省心紀」と題する「ノート」をつけていたようです。その表題には、「日々の過ちを紀して自らを反省する」という意味がこめられています。具体的には、朝起きてから夜寝るまで、自分が犯した過ちを点検して記入し、月末にその総数を調べ、とくに多くなつた過ちを注意して直していくのです。ただし、重大な悪についてはあえて記入しませんでした。大悪はすべて小悪から始まるのであり、小さな過ちを防げなければ、大きな過ちを記しても意味がないと考えたからです。呂坤は長い間このような自己点検を実践し、人にも勧めていたといえます。

では、私たちがもつとも犯しやすい「過ち」とは何でしょう。呂坤はそれを「自是自私」の四字で表しています。すなわち、自分だけが正しいと思ひ込み、自分だけを擁護する態度です。他人のことなど考えず、自分さえよければいいという姿勢。それは、先に触れた公務員の不祥事にも見られるものです。「我も人ももの仕合わせ」をめざす私たち自身が克服しなければならぬ大きな課題でもあります。

そうした過ちを克服するために、まず必要とされるのは、自らの過ちを認識することです。人は誰でも、さまざまな過ちや失敗を繰り返しながら生きていかざるをえません。だからこそ大切なのは、過ちを犯さないことではなく、過ちを犯したときにそれを素直に認め、反省し、繰り返さないよう努めることなのです。そのためにはもちろん、外からの指摘にも素直に耳を傾けなければなりません。

私たちが毎朝唱和する「朝の誓」の五か条は、すべて「今日一日」という言葉から始まります。それは、昨日までの自らの行いを反省し、過ちや失敗があればそれを繰り返さないようにするための、ひとつの節目であり、善き生活に向かって進むための「踏み切り台」でもあります。自らの過ちから目をそむけるのではなく、そして過ちをいつまでも引きずって苦しむのでもなく、「今日一日」を節目として新たなスタートを切ること。それこそが実践倫理の基本的な姿勢なのです。

ところで、善き生活をめざすうえで最大の障害となるのは何だと思われませんか？ 呂坤は「財色名位」、すなわち財産・性愛・名声・身分に対する欲だといえます。しかし彼は、人がそのような欲を持つのは自然のなりゆきだと考え、欲望そのものを否定することはありませんでした。そのため、禁欲を唱えるのではなく、過度な欲望を抑制する道を説いています。過度な欲望を抑えることが「自是自私」の過ち、すなわち自己中心的な生き方から逃れる最善の方法だと考えていたのです。

『呻吟語』についてはまだまだ触れておきたいことがありますが、機会を改めることにし、最後に「道徳的实践」についての傾聴すべき指摘をご紹介します。

「もし困難なことを先に処理するのを正しいと認識し、ひたすらその態度を持ちつづけ、いくら人からさんざん悪口をいわれても、びくとませず、年々歳々変ることなく、さしむき何の効果が得られなくても、やはり変ることなく、こうしてしばらくの間、信念を守りつづけていると、おのずから然るべき効果が得られるものである。だから道徳的实践は順序を追って進めて行き、その効果はあせらず落着いて待つべきものである」(同前)

大切なのは信念をもった日々の実践であり、速やかな効果だけを求めてはならないということです。